

【 最近の法座の様子 】



[6/25 武田一真師(前列左から3人目)]



[6/11 内田正祥師]



[5/28 桜庭尚吾師]

しんらん同人

No.575

7・8
月号

浄土真宗本願寺派 誓願寺

〒171-0052 東京都豊島区南長崎1-3-8

【電話】03-3950-7828

【ホームページ】<http://www.seiganji-tokyo.jp/>副住職
法話

他力本願

誓願寺 副住職 古賀明徳



日常会話で「他力本願」と聞くと「自分で努力せずに、他人の努力や援助をあてにすること」と用いられることが多いようです。

しかし仏教で用いられる時は「私たちの幸せになりたいという根本的な願いを、他である方・命の行方に関しては阿弥陀様の力を頼りにすること」を表しているではありません。

親鸞聖人は「他力とは如来の本願なり」とお示しくださっています。親鸞聖人は他力という言葉は、阿弥陀様のお力に限定して用いられました。

阿弥陀様の根本の願いは私達と違って「自分が幸せになりたい」というものではありません。「自分自身ではなく、生きとし生ける全ての者を幸せにしたい」というのが阿弥陀様の根本の願い、根本願です。

阿弥陀様はその根本願をかなえるために、私たちが量ることの出来ないほどの時間考え

・ご修行され、それを叶えることのできる南無阿弥陀仏のお念仏となり、今私たちの上に至り届いて下さっているのです。

他力本願を思う時、他力という言葉の上「利益」という言葉を付けて「阿弥陀様の本願から起こった(利益を)他(者に与える)力」と読むと、他力本願という言葉の本当の意味がより分かり易く受け取らせて頂くことが出来るのではないのでしょうか。

阿弥陀様はご自身の幸せよりも、まず先に、他である私たちの幸せを考えて下さり、他者の幸せを自身の喜びとして受け取ってくださる仏様なのです。

今月の「しんらん同人」に故岡本泰雄・初代住職の領解が掲載されています。辞書には「領解とは、仏の教えを聞いて悟る事」と説明されていますが、浄土真宗においては、阿弥陀様のお心を自身がどのように頂いているかという意味になります。阿弥陀様から頂いている他力本願のはたらき・力。今一度しっかり考えさせていただきます。

合掌

われもひかりのうちにあり

誓願寺住職 古賀尚之

先月お寺でお同行の葬儀を行いました。式中の法話を、助韻として脇で聞いていた副住職から「住職の他力本願の使い方が少し誤解を与えるので注意した方が良いでしょう」と忠告の言葉がありました。

早速詳細を確かめたのが冒頭の「他力本願」についてです。古来からある言葉も時代の変化とともに、その使い方や意味するところが変わることも多々ありますが、間違っってはならない部分もあります。今後注意したいと反省いたしました。

最近こんな言葉が頭に浮かびます。

「君子豹変す」中国の易经にある言葉です。

この言葉を聞くと現在では「要領のよい人は、今までの態度をすぐ変えて、主義も思想も捨ててしまう」という、どちらかというと悪口に近い使い方をされています。しかし本来は「優れた人は、過ちは直ちに改め、速やかに良い方向に向かう」という良い評価の言葉です。

豹変とは、豹の毛が秋になって抜け替わり、紋様が鮮やかになることで、これを人の態度が一変することにたとえたものです。

また論語にも「過ちては、改むるに、憚ることなかれ。過ちて、改めざる、これを過ちという」

「しんらん同人」の発行や、皆様とのお話も失敗を恐れては前に進めません。間違った時には「ごめんなさい」でお許しを頂きながら、成長してまいりたいと思う次第です。

合掌

私の領解

誓願寺初代住職 故岡本泰雄
(四十歳当時の法話)

私は全く幸せ者だと思う。常に如来の大慈悲に生かされて生きているからである。

私が如来を思う時も、忘れていた時も、常に思い続けてくれる如来が在しますからである。

如来は大慈悲心のありたけを南無阿弥陀仏のみ名に仕上げ、私に恵まれる。私はそのみ名を称え、如来は常に我と共に在しますことを知らされる。

如来の光明は私の心奥を照らしたもうて私の真相を知らしめたもう。

私は私自身を知らなかった。正しき我であり、善なる我であり、まことなる我であると思いついていた。

私の良心の灯は、ロウソクの火にも及ばぬ、あわれなものであった。されば私の全てを照らし出す力のない光であった。

私は今、限りなく障りなき如来のみ光に遇い、罪深き我なりを知る。一日一日がただ煩惱の波に翻弄されながら生きていた自分であった。

そしてその波は、知らぬ過去から打ち寄せてきた波であった。もし仮に、今起こりくる波を止めようとしても、過去の波の力ではどうすることも出来ない力であった。

そしてその波はこれから先いつまで荒れ続けるかわからぬ大波である。山のようなうねりを持ったこの大波をどうすることも出来ない自分であった。

遠い闇の底からごうごうと打ち寄せる波、遠い未来にまでうねりゆく波、その波の不安な音を、現在の自分の心の底に聴くことが出来る。無明の中を大波に翻弄されてゆく我は、救いを求める

声も力もない。力なき我は全く救われる望み望み無き者であった。

『いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし』は、聖人の血の出るような苦悩の叫びであった。されど、その叫びこそ、如来の叫ばしめたもうた声であり、如来の光明の透徹であった。

地獄一定の我こそ『必ず救う』の目当てであった。救われるか救われないかは私の問題ではない。救わずばやまぬ如来の真実のみであった。

何とか落ち着きたい、安らかになりたいと永い間願ひ求めたことであった。求めても求めてもそれは無明の底にうごめく我でしかなく、どこに至りつくやら判らぬ我であった。

今しも、如来の声を聞けば、如来こそ我が苦悩を見通し、この苦悩ゆえにこそ本願を成就したもうたことであった。

われ如来を求めしに非ず、如来こそ我を求め続け給いし真実の親であった。

間違わぬのは、無明の底から差し出された煩惱の手ではなく、間違わさぬ手・真実の親の手であった。無窮の願力の前には、善悪も正邪も問題とはならぬ。罪業深き我なるが故に救済の行が成就せられたのである。

一つの念仏の中に、あふるる大慈悲心が盛られてあった。釈迦も善導大師も親鸞聖人も蓮如様も、みんなこの慈悲に恵まれて生き抜かれた人達であった。尊い一生を通じて得られた喜びの実感そのまに、我に伝え知らしめられた善知識であった。この善知識なくば行信を獲る身とはなり得なかつたであろう。『たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ』この口からほとぼしる念佛、ただ一声の念佛も、この念佛が出るまでにはどれ程のご苦労がかけられたことであろうか。

社会に生きる限り社会人としてつくすべきつとめに励まなくてはならない。しかし世の人々の恩恵に報い得るだけの営みが私になされているであろうか。

なし得ぬ私を黙って許してくれる世の人の情けを有難く思う。間違うかもしれない、きつと間違いだらけであろう。それを許されて生きるにはただ合掌するばかりである。

恵まれて生きる私は、ただ全力を尽くして生きよう。御念佛申しながら、大悲のみ顔に泥を塗ることなきように。

やがて愛する者を残してただ一人この世を去らねばならぬ時が来るであろう。まぬがれぬ人間最後の日である。されど、帰るべき家がある。如来に抱かれながら光明無量の浄土に帰るのである。ああ幸せなる哉。

memories



【50歳頃の岡本泰雄師】



【40歳頃の岡本泰雄師(中列左)】

※真ん中で抱っこされているのは現在の坊守です

ご法座等
のご案内

どなたでもご自由に
ご参加いただけます。
参加費は無料です。

7月

7・9
(日)

■午前十時～

孟蘭盆会

【森島順英（熊本県）】

■正午～

医療相談

【佐藤公彦医師】

7・16
(日)

■午前十時～

なかよしクラブ

(乳幼児から小学生までとその保護者)

7・23
(日)

■午後一時～

定例法座・祥月命日合同法要

【濱畑僚一師（大阪府）】

8月

8・13
(日)

■午前十時～

孟蘭盆会

【柳父一道師（広島県）】

8・20
(日)

■午前十時～

なかよしクラブ

(乳幼児から小学生までとその保護者)

8・27
(日)

■午後一時～

定例法座・祥月命日合同法要

【片山量海師（長崎県）】

編集
後記

私にとって善知識とは？

「古賀馬骨」私の父・故古賀保雄が昭和二十年代、私が小学生の頃に使用していた名刺に記載していた名前です。

なぜこんな名前を？と尋ねましたら「うーん」と言ったきり何も言いませんでした。

多くの学友や同僚を失った戦争から十数年。混乱の中で、自分の命の立ち位置や使命感を突き詰めた名前だったように、今思うのであります。

人として生まれ、お浄土に生まれることを受け給わらせていただいた私にとって、大切な善知識の一人です。

・お寺の外壁と、正面階段の補修がやっと終わりました。雨天でも滑らない階段は安心です。



〔補修後の外観〕



〔正面階段〕

・本年四月から、大恩寺（八王子）の大学二年生の長女が離れに下宿しています。加えて七月中旬にはベトナムから孫たちが一時帰国します。また賑やかさが戻ってまいります。楽しみです。